

広島経済大学英語カリキュラム改革の 経緯と現状報告

麻 畠 徳 子・上 田 みどり

Paul Walsh・梶 原 英 二

迫 田 奈美子・田 中 佑 美

田 辺 洋 子・Mark Tankosich

本 岡 亜沙子・森 瑞 樹

山 本 貴 裕・Roger L. Reinoos

John A. S. Wild

はじめに

広島経済大学では平成25年4月から同26年6月にかけて計31回開催されたカリキュラムコーディネート会議（以下、CC会議）¹⁾において、平成25年2月の教授会での石田恒夫理事長の宣言——「今後、広島経済大学は学生に勉強させる大学になる」——を具体化するための全学的なカリキュラム改革案が検討された。そのなかで気づいてみれば「英語」のカリキュラム改革が議論のほぼ中心に位置していた。CC会議ではさまざまなメンバーの案が飛び交うなかで、英語カリキュラム改革をめぐる議論は二転三転したが、最終的には平成25年6月に理事長から提出された案を基本としつつ、英語科案も一部取り入れるかたちで決着した。平成27年度からはじまった本学の「新」英語カリキュラムがそれである。

新カリキュラム最大の特徴は、1年次に「月曜日から金曜日まで毎日」行われる「45分」授業である。従来、本学の学生は1年次に90分の必修英語の授業を週2回（英語AⅠ・Ⅱと英語BⅠ・Ⅱ；Ⅰは前期、Ⅱは後期、

以下同様)受けていたが、新カリキュラムでは45分の必修英語 A I・II (リーディング・ライティング中心, 40人/クラス)を週2回, 45分の必修英語 B I・II (リスニング・スピーキング中心, 20人/クラス)を週2回, 45分の必修英語 C I (ボキャブラリー・グラマー中心, PC 教室にて100人超/クラス)を週1回, つまり45分授業を週に計5回受けることとなった。英語必修の単位数はそれまでの4単位(英語 A I・IIで2単位, 英語 B I・IIで2単位)から, 必修英語 A I・IIと必修英語 B I・IIがそれぞれ1単位/semester, 必修英語 C Iが1単位/通年の計5単位に増加した。成績評価も厳格化され, 成績の「90%」は各semesterにおいて計4回(平成29年度からは計3回)実施される小テストの合計点で計算し, それに平常点の10%を加えることになった。また, 1年次においては, 入り口での機会の平等を重視し, 基本的にはレベル別の教育を行わないこととし, 教科書と小テストは共通のものをを用いる方針が採択された(例外として英語力上位10%については特別クラスを設けるが, 教科書と小テストは共通のものを使用)。

その一方で, 2年次には「90分」の「選択必修」科目を前期・後期にそれぞれ1単位(1科目), また45分の必修英語 C II(1年次の必修英語 C Iの続き)を通年で1単位, 計3単位履修することとなった。90分の選択必修科目には, 英語のコミュニケーションにおける「受信」面を強調する英語理解(40人/クラス)と, 「発信」面を強調する英語表現(20人/クラス)の2種類を設けた。学生はそのうち1種類を「選択」し, それぞれの種類において「発展」「標準」「基礎徹底」の3つのレベルに分かれ, それぞれ異なる教科書で学び, 異なるテストを受けることとなった(2つの種類と3つのレベルで計6種類)。ただし, 成績評価についてはどの種類, どのレベルにおいても, やはりその「90%」を, 複数回実施する小テストの結果にもとづかせ, 残りの10%を平常点とする方針が採択された。

このように新カリキュラムでは, 本学の学生は1~2年次に英語の必修科目を6単位分(必修英語 A I・II, 必修英語 B I・II, 必修英語 C I・

Ⅱ), 2 年次に選択必修科目 (英語理解Ⅰ・Ⅱまたは英語表現Ⅰ・Ⅱ) を 2 単位分, すなわち計 8 単位分修得することを要求されるようになった。旧カリキュラムでは 1～2 年次に英語の必修科目を 4 単位, 選択必修科目を 2 単位の計 6 単位を取得することが要求されていたことを考えると, 2 単位分の増加である。また, 必修科目と選択必修科目の双方において「再履修」クラスは設けず, 単位を落とした学生は次年度に当該科目を繰り返すことになった。必修・選択必修 8 単位分以外にも, 英語の学習をさらに積み上げたい学生に対しては, いくつかの「選択科目」が開講された。

これが本学の新しい英語カリキュラムの概要であるが, よくよく考えてみれば, 今回の英語カリキュラム改革をめぐる議論は, もとはといえば CC 会議に先立つこと 4 年, 平成 21 年度に本学の英語科教員自身のイニシアチブによりはじめられた改革議論に端を発するものである。この時点で英語科内では本学の英語教育の問題点に関する共通認識が形成されており, それにもとづき, 部分的ではあるがすでに「改革」が動きはじめていた。

その「改革」の焦点は当時の英語必修科目のひとつ, 英語 AⅠ・Ⅱにおかれ, この科目に関連してプレイスメントテストの実施, 3 段階のレベル分け, 共通テキストの採用, 共通の期末試験の実施など新たな取り組みが行われ, 一定の成果を収めていた。その一方でいくつかの問題点も指摘されていた。これらの問題点は CC 会議がはじまったとき英語科から同会議に報告され, そこでの議論による解決が期待された。以下での英語科各教員による科目別の報告に示されるように, これらの「問題点」は CC 会議により決定された新英語カリキュラムによって, 一部は解決され, 一部は未解決のままである。本学での英語カリキュラム改革の成果と課題を探ることを目的とする, この教育実践記録のはじめの部分で, これらの問題をいま一度振り返っておくことは有用であろう。

平成 21 年度からはじまった英語科主導の「改革」が 4 年経過した時点で, 英語科教員の共通認識となっていた問題は主に以下の 4 つであった。第一に, 3 段階のレベル (英語力が高い順に a, b, c) に分けたとはいえ, 教

科書と期末試験が共通であったために、aレベルとcレベルの両極において、それぞれ「浮きこぼれ」と「落ちこぼれ」の問題が起っていた。第二に、cレベルにおいては、基本的な学習態度が未形成の学生が多いために、1クラスあたり40名前後の受講生を抱える授業の運営が困難となっていた。第三に、英語Aとその関連科目、英語Bとの連携がとれておらず、それぞれの科目が別々に運営されていたために、英語教育全体としてみた際に一貫性を欠いていた。第四に、既存の英語教育では、学生は「単位取得さえできればよい」と易きに流れる傾向にあり、2年以降は彼らのほとんどが英語から遠ざかってしまう傾向にあった。

実はCC会議がはじまった平成25年度はくしくも、英語科がこれらの問題の解決の糸口として、英語AⅠ・Ⅱでのeラーニング（アルク英文法コース）の導入による「授業外学習」の取り組みをはじめた年でもあった。英語AⅠ・Ⅱでのeラーニングの実施が軌道に乗れば、クラスサイズを「大人数」化し、一度に多くの学生が各人のレベルに合った教材で主体的に英語学習に取り組む環境をつくることができる、またそれと同時に英語BⅠ・Ⅱでは逆に「少人数」化を図り、教員と学生、または学生同士の人間的なコミュニケーションをより密にできる——これがこの取り組みの狙いであった。

CC会議での本学英語教育の改革をめぐる議論は、この英語科主導の改革と同時進行し、上に述べたようなかたちでの決着をみた。以下の教育実践記録では、このような流れのなかで生まれた広島経済大学の新英語カリキュラムの各構成部分についての報告を行う。1章では1年次および2年次の必修科目について報告される。麻島徳子²⁾、田中佑美³⁾、迫田奈美子⁴⁾が共同で1年次の3つの必修科目、すなわち必修英語AⅠ・Ⅱ、必修英語BⅠ・Ⅱ、必修英語CⅠを、梶原英二⁵⁾が2年次唯一の必修科目、すなわち必修英語CⅡを担当する。2章では2年次の選択必修科目について報告される。森瑞樹⁶⁾が英語理解・基礎徹底を、田辺洋子⁷⁾が英語理解・標準を、本岡亜沙子⁸⁾が英語理解・発展を、マーク・タンコシッチ⁹⁾が英

語表現・基礎徹底を、ポール・ウォルシュ¹⁰⁾が英語表現・標準を、ロジャー・ライナス¹¹⁾が英語表現・発展を担当する。そして3章では、選択科目全般についてジョン・ワイルド¹²⁾が報告する。なお、「はじめに」は山本貴裕¹³⁾が、「おわりに」は上田みどり¹⁴⁾と山本が担当する。

この教育実践記録が、広島経済大学の英語教育の現状を評価し、今後私たちが進むべき道筋について考える材料となることを願うしだいである。

1. 必修科目

この章では本学の新英語カリキュラムのうち1年次と2年次の必修科目について報告する。該当科目は必修英語AⅠ・Ⅱ、必修英語BⅠ・Ⅱ、必修英語CⅠ・Ⅱである。

1.1 必修英語AⅠ・Ⅱ、必修英語BⅠ・Ⅱ、必修英語CⅠ

まずは1年次の必修科目、すなわち必修英語AⅠ・Ⅱ、必修英語BⅠ・Ⅱ、必修英語CⅠについての報告からはじめる。

1.1.1 平成27年度改革以前の必修英語科目とその概要

英語学習では4技能（読む・聞く・話す・書く）をバランスよく習得することが望まれる。ただし、学習の現場ではこれらの技能習得を同時並行して指導することが難しい。たとえば、「読む」技能は教員と学生が同じテキストを用いることによって一斉授業の形式で指導することが可能だが、「話す」技能は教員と学生間の対話的なやりとりをつうじて進めることが主となるため、一斉授業の形式には馴染まない。そのため、多くの場合、英語学習の現場では、4技能のうちのいずれかに特化した授業を複数組み合わせることによって、総合的にバランスのよい英語力を習得させることを目指している。

平成27年度改革以前の必修英語科目でも、こうした目的をもって、すべての1年生を対象とした「英語A」「英語B」という2種類の必修科目を設けていた。「英語AⅠ・Ⅱ」は「読む」技能を学習の中心に置き、他方

「英語 B I・II」は「話す」技能をその中心に置いた科目である。それぞれ前後期 1 単位ずつ、A・B を併せて合計 4 単位が卒業必修科目となっていた。次の表 1 は、「英語 A・B」の内容を概略したものである。

表 1 必修英語科目（全 4 単位）

総合的にバランスのよい英語力を目指す	
<p>英語 A I・II（2 単位）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「読む」技能中心（受信型技能） ●40人クラス ●教科書は全学統一 ●評価の40%は全学統一試験から、20%は統一小テストから 	<p>英語 B I・II（2 単位）</p> <ul style="list-style-type: none"> ●「話す」技能中心（発信型技能） ●40人クラス ●教科書は各クラス担当教員が選択 ●評価は各クラス担当教員の裁量による

この表 1 から分かるように、「英語 A」「英語 B」を両方受講することで、受信型・発信型技能をバランスよく習得することを目的として、必修英語科目は構成されていた。しかし、実際の学習の現場では、両者の科目が相互補完的に運営されていたかという点、そこにはいくつか問題があった。ひとつは、「英語 A」と「英語 B」の担当教員間での意思疎通が図りづらい状況にあったことである。読解の難易度を均等にするため、教科書を全学年で統一する「英語 A」に対して、指定された教科書候補のなかから教員がいずれかを選択することのできる「英語 B」という非対称的な授業形態は、その成績評価にも影響を及ぼしていた。具体的にいえば、毎回の授業では共通の小テストを実施、定期試験期間中には統一試験を実施し、その結果が成績の60%を占める「英語 A」に対し、「英語 B」は評価の全てを担当教員の裁量に任せるというアンバランスな状況を生み出していた。こうした状況は、「英語 A」と「英語 B」の担当教員が、お互いに何をどう教えているのか把握していないという問題を生んでいたといえる。また逆に、両クラスの対称性を保ったがゆえの問題もあった。それは、「話す」という技能を中心とする「英語 B」において、「英語 A」と同じように設定された40人というクラスサイズでは大きすぎるということである。実際、

英会話という学習を成立させるためには、教員ひとりにたいして学生40人というクラスでは、運営が困難になることが多かった。学生一人ひとりにきめ細やかな指導を行うためには、「英語 B」のクラスサイズを小さくすることが望まれた。さらに、「英語 A」のほうでは、英文読解という「読む」技能に特化した教科書と試験内容だったために、英作文という「書く」技能に結びつける指導までには至っていない点が、受信型技能と発信型技能のあいだの断絶を生む原因となっていたともいえる。

こうした学習の現場での課題が浮上していたなかで、これらの問題を解決すべく、必修英語科目の改革が検討されることとなった。文部科学省が、平成32年を目処に大学受験を4技能の総合的なコミュニケーション能力を評価する試験に変えていくという方針を明らかにする¹⁵⁾なかで、本学の必修英語科目も「総合的なコミュニケーション能力」の強化という当初からの学習目的は継続して掲げつつ、4技能の習得に配慮した、より効率的な学習のあり方を追求する改革に着手したのである。

1.1.2 平成27年度改革以降の必修英語科目とその概要

教育改革を経て、本学では1年次の必修単位を4単位から5単位へ引き上げ、4技能（読む・聞く・話す・書く）の習得に対して全体で連携をとった英語カリキュラムを実施している。表2は現在の英語カリキュラムの概略である。

第一に、1年次の必修英語科目を4単位から5単位へ引き上げることで、毎日英語に触れる機会を設けている。とくに、改革前まで90分授業であった1年次の必修英語科目を45分ずつに分割し、それぞれ週2回行うこと、また、1単位の必修英語C Iを増設することで、週5日、毎日英語に触れる学習環境を提供している。

第二に、必修英語Aを「読む・書く」、必修英語Bを「聞く・話す」技能中心にすることにより、各授業内において英語のインプットからアウトプットという流れを作り出し、4技能の習得をバランスよく行えるようにしている。受信型（読む）・発信型（話す）といった2技能に特化してい

表2 1年次の必修英語科目（全5単位）

総合的にバランスのよい英語力を目指す	
必修英語 A I・II（2単位） ●「読む・書く」技能中心 ●40人クラス ●教科書は全学統一（AB 同シリーズ） ●評価の90%は全学統一小テストから ●45分授業 週2回	必修英語 B I・II（2単位） ●「聞く・話す」技能中心 ●20人クラス ●教科書は全学統一（AB 同シリーズ） ●評価の90%は全学統一小テストから ●45分授業 週2回
必修英語 C I（1単位） ●「語彙・文法」 ●100人クラス ●必修英語 A、必修英語 B の語彙と教科書付属のオンライン教材（文法）を使用 ●評価の100%は全学年統一オンライン小テストから ●45分授業 週1回	

た習得技能目標を、各クラスのなかで受信から発信という流れを持たせた目標に変更することにより、学生が学習した内容を使う、つまり、コミュニケーションを意識する授業形態を構築している。

第三に、必修英語 B のクラスサイズを40名から20名にすることで、より多く話す機会を確保している。コミュニケーションに必要な「聞く」そして「話す」技能は、瞬発力が求められる対話的な技能であることを考えると、クラスサイズ変更はこれらの技能向上に大きく貢献すると考えられる。また、一斉授業の必修英語 A（40名）、オンライン学習の必修英語 C I（100名）という異なるクラスサイズを設けることにより多様な学習スタイルに対応できるように配慮している。

第四に、必修英語 A、必修英語 B において教科書を同じシリーズに統一し、さらに、必修英語 A、必修英語 B で使用する語彙・文法を必修英語 C I で学習するといった、科目間の連携をとっている。この連携により、学んだ語彙・文法を繰り返し使う機会がある科目間横断型のカリキュラム構成になっている。

第五に、必修英語 A、必修英語 B とともに各科目内で行う小テストにて

成績評価を行い、評価方法を統一している。例えば、平成27年度の必修英語Aと必修英語Bの小テストは1学期内に各4回あり、第1回目15点、第2回目20点、第3回目25点、第4回目30点の合計90点満点であった。小テストの中身については、第2回目に第1回目の範囲をもカバーする復習を取り入れた反復方式を採用した。残りの10点は出席状況、授業態度になっているが、単位取得は60点以上が条件であるため、そのほとんどは小テストの総得点で評価が決定する科目内統一型のシステムになっている。

概して、現在の1年次の必修英語科目は、改革前に問題としていた科目内、科目間の連携とクラスサイズを改善するに止まらず、英語に触れる頻度や統一した英語教育の実施を視野に入れた週5日、継続的に反復学習を行うカリキュラムになっている。本カリキュラムは、大学の方針である一定の水準以上の学力を持たせることを目標に実施されている。しかし、学生の学力向上に伴い新たな課題もみえてきた。今後も学生に合わせた教育を行うため、さらなる教育改善が望まれる。

1.1.3 教育改革の成果と今後の課題

平成27年度から始まった本カリキュラムは2年目を終えたばかりである。現時点で挙げられる成果には限りがあるが、旧カリキュラムにおける課題を改善すべく科目間の連動と科目内の統一を図り、異なる授業形態における反復学習による英語力定着を目指した英語カリキュラムとなっている。具体的には、必修英語A、B、C Iの3科目で同一シリーズの統一教材を使用することにより、学習内容やトピックが連動し相互補完的な学習が促進されている。また、一斉授業中心の必修英語A、少人数による活動中心の必修英語B、大人数による自律型オンライン学習の必修英語C Iと異なる授業形態の展開により、英語レベルや学習スタイルの異なる多様な学生に対応している。

必修英語C Iの授業で実施したアンケート結果によると、「毎日英語を学習する習慣が身に付き、45分の授業は短時間で集中できる」という感想が多くあり、45分×5日授業は学生からおおむね好評である。図1は「必

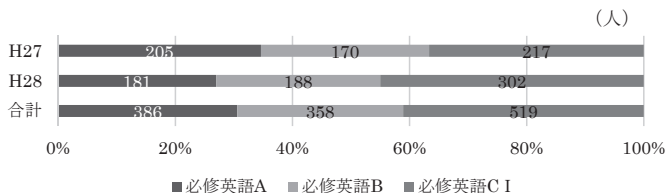


図1 自分に合う学習スタイル

必修英語 A/B/C I のなかで、どれが最も自分の学習スタイルに合っていますか？」という問いに対する結果である。

必修英語 C I のスタイルが合っているとした学生が約40%と必修英語 A、B に比べると若干多いが、ある程度均等に3分割されている。必修英語 A を選んだ理由としては、高校までの授業形式と似ていて慣れているから、英文読解が好きだから、人と話すのが苦手だからといったものが挙げられた。必修英語 B では、少人数でコミュニケーションがとりやすい、外国人の先生と会話ができる、ペア・グループ活動が楽しいといった理由が挙げられた。必修英語 C I を選んだ学生からは、自分のペースで好きな時間に勉強できる、毎週テストがあるので予習復習をするようになった、私語禁止の自習室のような静かな環境で勉強に集中できるといったコメントが挙げられた。このように、学生は各科目の特徴を捉えて自分に合う学習スタイルを見つけつつ、または逆に苦手な活動にも取り組むことにより、総合的にバランスのとれた英語学習を実践している。

旧カリキュラムの問題点のひとつであった評価方法についても、必修英語 A、B は評価の90%、必修英語 C I は評価の100%が全学統一テストによって決まるシステムが構築された。その結果、科目間の不均等、クラス間の不公平感は払しょくされた。

図2 は平成27年度生と平成28年度生の必修英語 A/B/C I の成績評価分布図である。新カリキュラム1年目の平成27年度はテストの難易度設定に苦慮した。結果的に、必修英語 B I の小テストは易しすぎたため40%以上がAA という成績評価となった。それとは逆に、必修英語 A II は小テ

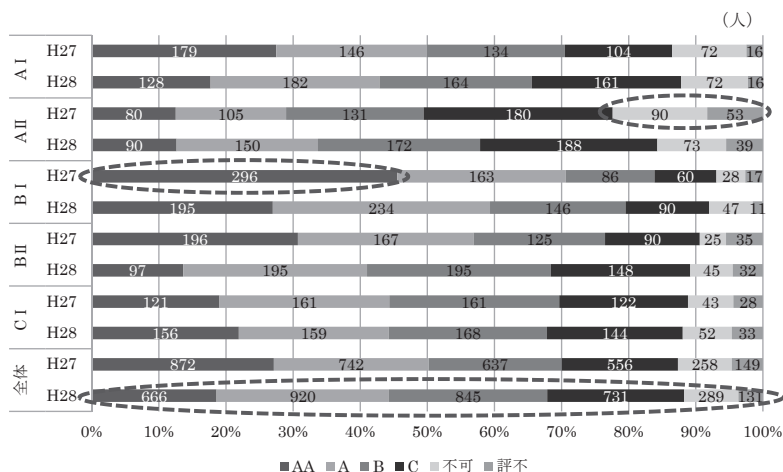


図2 H27 & H28年度生 必修英語の成績評価

ストが難しすぎたのか、20%以上の学生が不可または評価不能で単位を取得できなかった。そこで、1年目の経験をもとに2年目はテスト問題の難易度を調整した。その結果、平成28年度の評価は全体でAA, A, B, Cの割合がほぼ均等になり科目間の格差も減った。

ところが、一定の水準以上の学力を持たせるという大学の方針に沿う一方で、画一的な評価システムによる「浮きこぼれ」という新たな課題も生まれている。英語力や学習意欲の高い学生にとって、全学統一テストは簡単すぎる。この上位層の学生を対象に難易度の高い活動を取り組ませたとしても、それが統一テスト内容の範囲外で成績評価に直結しないため、学生のモチベーションを維持するのが難しい。かといってテストの難易度を上げると、英語が苦手な学生は単位を取得できないといった深刻な問題につながってしまう。

図3は平成27年度生のうち1年次で単位を取得できず、平成28年度に必修英語科目を再履修した学生の成績評価分布図である。再チャレンジの機会でもあったが、全体で単位を取得できた学生は約60%にとどまり、A以

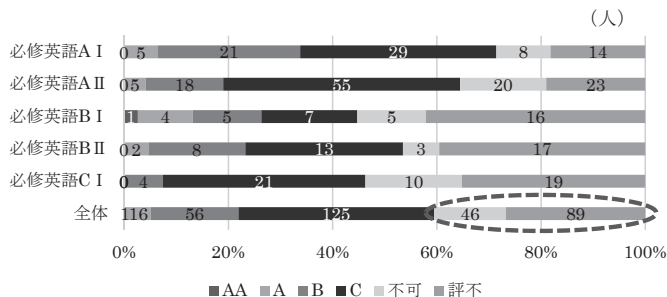


図3 H28年度 再履修者の成績評価

上の成績を修めた学生は約5%しかいなかった。つまり、再履修者のうち約40%は次年度に3度目の履修をしなければならないことになる。そのうち約60%が評価不能ということは、出席回数不足、またはテスト未受験が単位を落とした主な理由と推測できる。新カリキュラムでは必修英語4単位が2年次から3年次への進級要件にも含まれるため、このような学生は休学・退学者予備軍ともいえる。再履修者の増加は、カリキュラム運営上、教員配置や教室確保をさらに困難な状況にする。上記の課題を踏まえたうえで、今後も多種多様な学生に適した英語教育を行うため、さらなる教育改善が望まれる。

1.2 必修英語CⅡ

次に2年次の必修科目、必修英語CⅡについての報告をする。

必修英語CⅡは平成28年度から始まった新規科目であり、2年生が履修する唯一の45分の科目である。1クラス当たり100名前後の学生がいるため、パソコンを使ったeラーニング形式の授業を行っている。

この科目の副題である「ボキャブラリー&グラマー」が示す通り、必修英語CⅡは学生の語彙力と文法力を高めることを目指している。

この科目を開講するにあたり、語彙を扱う教科書の選定に苦労した。出版社が提供している教科書は、ほとんどがTOEIC対策用になっており、

本学の学生の語彙力を高める教科書としては向いていなかったからである。そこで、教科書は桐原書店の『データベース3000 [4th Edition] 書いて覚える英単語ノート【基本3000語レベル】』を採用した。学生が1日10語、1週間で50語の英単語を覚え、使えるようになることを目指すことにした。教科書に掲載されている単語の中で、前期は1から500まで、後期は501から1000までの単語を範囲とした。

当初、各期に単語テストを13回実施することを想定していたが、平成27年度からオンライン授業を実施していた必修英語CⅠの担当者から復習回を入れないと、単位を落とす学生が相当数出るのではないかという懸念が示された。そこで、単語テストの回数を文法テストの回数と合わせ各期10回にし、復習回を取り入れることになった。また、単語テストはすべて単語のスペルを書く問題だけを作成していたが、このことに関しても必修英語CⅠの担当者の助言を受け、50問中半分程度をリスニング問題に改めた。リスニング問題は、英文を聴きその単語の意味を5つ程度の選択肢の中から選ぶものである。

単語テストは次の回と復習回に同じテストを受けられるようにした。そのため、単語テストの平均点は回を重ねるごとに高くなっていった。例えば、あるクラスの単語テスト11の平均点は、1回目が48.7点、次の回が60.3点、そして復習回が70.1点となった。平均点が着実に上昇し、受講生の語彙力が高まっていることがわかった。

文法は、本学がすでに導入していたeラーニング教材を使うことにした。それは株式会社アルクの「英文法コース」である。英文法コースには3つのレベル（レベル1・2・3）と20の文法事項のセクションがある。必修英語CⅡでは1番下のレベル1のみを行い、前期にセクション1から10まで、後期はセクション11から20までを行うことにした。単語テストと同様、各期に10回テストを行った。文法テストの問題数は10問である。45分の授業で単語テストもあるため、この問題数に落ち着いた。その代り、適語選択を3問、空欄補充を3問、並び替えを4問と問題の種類を増やした。

前期は単語テストと同様に、次の回と復習回にも同じ文法テストを受けられたが、後期は1回しか受験できない制度を試してみた。その結果、1回しか受験できないことは、学生に心理的なプレッシャーを与えていることがわかった。

必修英語CⅡの初年度は、授業運営をはじめとして試行錯誤の繰り返しであった。学生も単語と文法に特化したeラーニング授業は初めてであったが、個々のペースで勉強できるスタイルは受講生にとって合っているようである。初年度の履修者は617名、そのうち単位未修得者は55名（不可11名と評価不能44名）、後者の割合は8.9%という結果であった。

1年間必修英語CⅡを実施してみて、教員が対処できない問題があることがわかった。それはシステムトラブルである。後期の月曜日のいくつかのクラスでサーバートラブルが2、3回起こり、学生がネットにアクセスできなくなった。後期が始まる前に、EduTrackという学習管理システムをアップデートしたため、サーバーに不具合が生じたらしいということであった。パソコンが起動できなくなると、この授業自体が成り立たなくなる。サーバートラブルが起こったクラスは、その日は授業をすることができず、授業予定が大幅に変更されることになった。今後もEduTrackをアップデートする度に、システムトラブルが発生するかもしれないという不安がある。

EduTrack 自体にも不具合がある。解答欄にカーソルがないときにbackspace keyを押してしまうと、テストが提出されてしまうのである。学生が操作に慣れるまでは、毎回2、3名の学生のテストが誤って提出されてしまい、その都度教員がその学生のテスト結果を初期化する必要があった。一方教員の立場からEduTrackを見てみると、100点満点のテスト問題しか作成できないという欠点がある。そのため、単語テストも文法テストも100点満点のテストを実施し、単語テストはテストの平均点 $\times 0.4$ 、文法テストはテストの平均点 $\times 0.1$ と、後で成績評価基準に合わせるために換算しなければならない。学生も自分で得点を換算する必要があり、現

時点で自分が何点あるかすぐにはわからない。そこで、EduTrackで40点満点や10点満点のテストが作成できるように、業者に要望している。

必修英語CⅡの初年度を終え、教員がこれから対処しなければならない課題も見えてきた。1つ目の課題として、優秀な学生のフォローがある。単語テストは最低でも2回受けられるが、優秀な学生は1回目のテストで満点、もしくは満点に近い点を取ってしまい、復習回にテストを受ける必要がないのである。複数回受験できることは優秀な学生の勉強意欲をそいでいると推察し、そのような学生が自発的に追加学習できるようにした。前期はリスニング問題として出題された単語を集め、単語の書き取り問題を紙媒体で作成した。しかしながら、各クラスに1、2名しか紙媒体による問題に取り組まなかった。後期はシステムトラブルのためテストを優先させ、優秀な学生へのフォローができなかった。平成29年度は優秀な学生がさらに勉強するようになる方法を探る必要がある。

2つ目の課題は、英語が苦手な学生のフォローである。授業にはきちんと出席し、単語テストを複数回受けているにもかかわらず、単語テストの平均点が60点に満たない学生がいる。1クラスの人数が多いため、そのような学生に対してきめ細かい対応をすることがなかなか難しい。また、学習障害の1つである書字障害という診断を受け、平成29年度にこの科目を受ける学生がいる。書字障害により、英単語のスペルを覚えることが非常に困難であることが判明している以上、障害者差別解消法に基づき合理的な配慮をしなければならない。

必修英語CⅡはほぼ毎回テストがあるので、毎回授業に出席することが求められる。しかしながら、心身上の理由で授業に毎回出席することが難しい学生がいる。彼らは授業に出席し、テストを受けなければならないと思えば思うほど、授業に出席できなくなってしまう。彼らに対してどのような対応ができるか、これが3つ目の課題である。

4つ目の課題は、平成30年度以降の文法教材である。現在使用しているALC英文法コースは、平成29年度で契約が切れてしまうため、新たな教

材を見つける必要がある。eラーニング教材はコストがかかるため、単語のように紙媒体の教科書を採用することも検討する必要がある。

以上、課題は様々あるが、この授業を受けることにより、学生の語彙力は着実に増えているはずである。平成29年度は2年目を迎え、再履修者も加わり、授業運営が難しくなるクラスが出てくるかもしれないが、課題を少しずつクリアしていき、必修英語CⅡの有用性を高めていきたい。

初年度は様々な試みを行ったが、平成29年度は、単語テストは次の回と復習回に、文法テストは復習回のみと同じテストを受けられるという授業計画を実施することになった。また、前期の1回目と後期の15回目の授業で、受講生に Vocabulary Size Test を受けさせ、どれくらい語彙サイズが伸びたかを測る試みを行うことを計画している。

2. 選択必修科目

この章では本学の新英語カリキュラムのうち選択必修科目についての報告をする。該当科目は英語理解・基礎徹底Ⅰ・Ⅱ、英語理解・標準Ⅰ・Ⅱ、英語理解・発展Ⅰ・Ⅱ、および英語表現・基礎徹底Ⅰ・Ⅱ、英語表現・標準Ⅰ・Ⅱ、英語表現・発展Ⅰ・Ⅱの計6種類である。

2.1 英語理解・基礎徹底Ⅰ・Ⅱ

2015年度からの英語カリキュラム改革に伴い、平成28年度より英語理解系3科目、及び英語表現系3科目の2年次選択必修科目が開講されている。本報告では、英語理解・基礎徹底Ⅰ・Ⅱの初年度の開講状況を報告し、またその問題点を指摘することで、次年度以降の当該科目の円滑な運営への布石としたい。

2年次選択必修科目の受講生は1年次終了時に理解か表現かを選択し、プレイスメントテストの結果等により、それぞれ発展・標準・基礎徹底の3つのクラスにレベル分けされる。本報告の当該科目はそのレベル分けにおいて理解系科目の最も下位に位置付けられている。受講者の英語力につ

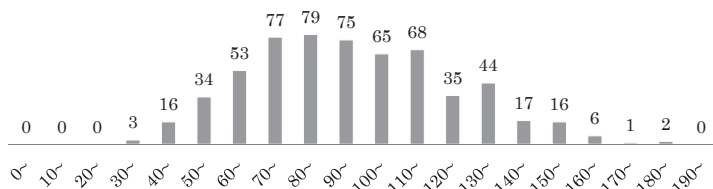


図4 2年次選択必修プレイスメントテスト結果

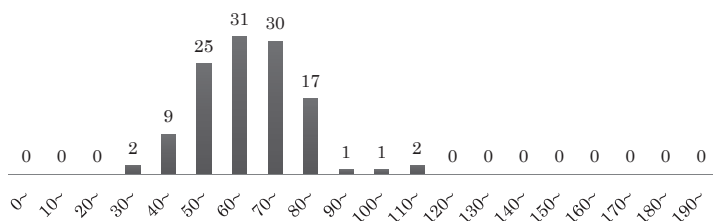


図5 2年次選択必修プレイスメント結果 英語理解・基礎徹底

いては、図4～5にあげた同テスト（200点満点）の結果を参照されたい。このような受講者の英語力に鑑み、当該科目の平成28年度の学習内容は、英語初学者のそれを反復させることにより、受講者個々の英語力の基礎固めを促す目的を持って構成された。しかしながら、当該科目受講生の同テストの平均は約63点であるのに対し、それを大幅に上回る学生が複数名存在している。このような学力を備えた受講生にとって、当該授業の内容は著しくそぐわないものであり、単位取得が極めて容易となることは明らかである。（成績の公平性に関しては改めて後述する。）同テストによるクラス分けの妥当性と有効性に関しては、今後改めて討議する必要がある。

また、クラス分けの問題点は1年次の必修英語5科目の評価とも連動している。ここで、図6で示されるプレイスメントテスト結果と1年次必修英語成績の相関を参照されたい。当該科目が設定している受講生の学力レベルは科目名からも自明である。それにも関わらず、1年次必修英語でB評価以上の成績を得た受講生が多数存在することは懸念すべき点である。1年次必修英語から2年次選択必修への円滑な移行を確保するためにも、またそれに関わる受講生の英語学習動機を保つためにも、科目間の一層密な連携が求められる。

その他2つの英語理解科目と比較した基礎徹底Iの成績状況は、図7,7'で示すとおりである。レベル別の履修内容が孕む成績評価の公平性に関する懸念は、克服すべき課題としてCC会議においても数年に渡り繰り返し議論されてきた。当科目の成績分布のみを概観する限りにおいては、C評

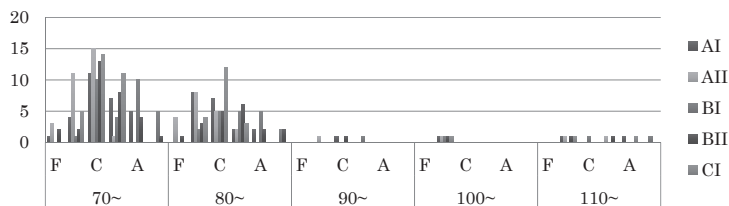
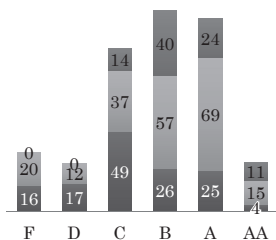


図6 プレイスメントテスト結果と1年次必修英語成績の相関

英語理解2016

■基礎徹底I ■標準I ■発展I



英語理解・基礎徹底I

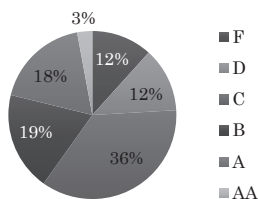


図7,7' 英語理解科目と比較した基礎徹底Iの成績状況

英語理解2016

■基礎徹底Ⅱ ■標準Ⅱ ■発展Ⅱ

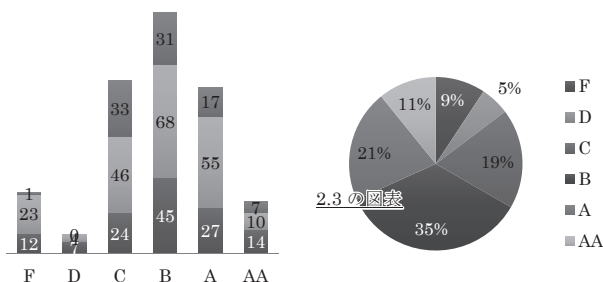
英語理解・基礎
徹底Ⅱ

図8.8' 基礎徹底Ⅱの成績分布

価以下が約60%となっていることで、ある程度の公平性は確保できている。しかしながら、A評価以上の割合が依然高いことも直視すべき点である。何より図8（8'も同時に参照されたい）にある基礎徹底Ⅱの成績分布は、B評価を頂点とし高評価への傾斜が緩やかになる放物線状となっている。これは、英語力の基礎を定着させる目的で、基礎徹底Ⅰの学習内容を繰り返したことに起因する。この履修内容は、学力の定着という面では一定の効果を示す証拠ではあるものの、単位取得という面においては明らかな易化であり、大幅な見直しの必要性がある。

そもそも英語初学者の学習内容を大学2年次で行うべきではないのだが、現行の入試制度だと基礎学力のない学生が入学できるのも事実である。学力重視の大学改革を進めるのであれば、この点から見直してゆくことも求められる。

2.2 英語理解・標準Ⅰ・Ⅱ

2年次選択必修科目である「英語理解・標準」は「理解」と「表現」2コースの前者を選択した469名の内、一年次終了時に実施したプレイスメントテスト（合計400点）で平均値が226.3点（56%）であった226名を対

象に6クラス開講された。

「英語理解・標準」は、学生が1年次に習得した理解力と聴解力をさらに伸ばすことを目的としている。具体的には、幅広いジャンルの英文を読み、内容把握に関する設問や、関連の文法問題等を解くことによって、英文をより正確に理解する力を身につける。同時に教科書付属のCDを聴き、英語の音やリズムに慣れることで、聴覚的な英語力伸展にも重点を置く。

教科書はCengage Language社刊『Reading Explorer Foundations Second Edition』を使用。全12ユニットの内、前後期共、より興味深いと思われる4ユニットA・Bのいずれかを取り上げ、各ユニットの指定範囲(本文・Reading Comprehension・Reading Skill・Vocabulary Practice)を三週間で学習する。平成28年度は前期にユニット1 Mysteries・A, ユニット2 Favorite Foods・A, ユニット4 Shipwrecks・A, ユニット5 Science Investigators・Aを、後期にユニット7 Mind's Eye・B, ユニット8 Animal Wonders・B, ユニット9 Incredible Domes・A, ユニット11 Giants of the Past・Aを行なった。筆者自身は、因みに、第1週目では教科書付属の補助教材——テキストのそれとは異なる、本文内容把握問題——を用いることで速読のテクニックを身につけ、第2週目では独自の本文対訳プリント(随所に空欄を設け、重要な文法説明を盛り込んだ)を用いることでより緻密な熟読のテクニックを磨き、第3週目でReading Comprehension等、復習もかねた確認学習で「英語理解」の総仕上げを行なうよう工夫した。

テストは第8週目で前半2ユニット(40点満点)、第15週目で全4ユニット(50点満点)を対象に実施し、これに平常点(10点)を加えて総合的な評価を下す。出題形式は教科書の設問に準じつつも、難度・配点の高い英作と並べ替えの問題もユニット毎に各一問付加し、より正確な実力を計る試みがなされている。来年度は記述式の問題を追加することが検討されている。

評価得点の分布は前期でAA15人(7.1%), A69人(32.9%), B57人(27.1%) C37人(17.6%), 不可12人(5.7%), 評価不能20人(9.5%), 後

期でAA10人（4.9%）、A55人（26.7%）、B68人（33.0%）、C46人（22.3%）、不可4人（1.9%）、評価不能23人（11.2%）となっている。AA評価とA評価が前期から後期にかけては1割弱減少し、B評価とC評価が1割強増加している現象は、教科書の内容の若干の難化と学生自身の学習意欲の低下の反映とも見なせる。これが「理解・標準」だけでなく、英語諸科目に共通する傾向だとすれば、今後何らかの歯止めの対策を講じる必要が出て来よう。

学生の受講態度は概ね、真摯かつ熱心であった。前期当初は一年次に使用したテキストとのレベルの差に戸惑う学生も数名いたが、次第にテキスト内容、授業形態に慣れて行き、最終的にはまとまりのある緊張感の中で学習に取り組んでいたように思う。

教える側としても「発展」と「基礎徹底」の中間層ということで、受講生の数の多さ、学生の習熟度・意欲の差等、悩みは尽きなかったが、今後も学生一人ひとりに対すより肌理細かい指導を心がけながら、様々な問題に対処して行きたい。来年度は新2年生に再履修者が加わるため、初年度とは異なる状況が想定される。担当者間でのより綿密な意見交換が求められよう。

2.3 英語理解・発展Ⅰ・Ⅱ

本稿は、2年次選択必修科目「英語理解・発展Ⅰ・Ⅱ」（発展、標準、基礎徹底レベルのうち最上位レベルに該当）における1年間（平成28年度）の実践報告である。

習熟度別クラスは、1年次必修英語の成績と1年次終了時に実施したブレイスメントテスト（自主開発テスト、英検準2級～3級レベル）に基づいて編成した。英語理解コースを希望した平成27年入学生全469名の各レベルにおける平均値は、上位から順に、発展（全90名）が合計400点中315.2点（78.8%）、標準（全226名）が226.3点（56%）、基礎徹底（全153名）が162.8点（40.7%）であった。

教科書は *Reading Explorer 1* (Cengage Learning 社, CEFR レベル : A2-B1) を用いた。これは 1 年次必修科目 (必修英語 A I ・ A II ・ B I ・ B II ・ C I) の統一教材 *Unlock 1* (Cambridge 大学出版局, 同レベル : A1) や英語理解・標準 I ・ II の教科書 *Reading Explorer Foundations* (同レベル : A2) より 1 ～ 2 段階難易度の高いものに当たる。授業では, 幅広いテーマの英文を読み読解力や聴解力, さらに他国の文化や歴史について学ぶ姿勢を身に付けることを目標に, 毎週 1 ユニットずつ学習した。

成績評価は, 授業内テスト90点 (合計 3 回) と平常点10点の合計点で行った。受講者の成績分布は, 前期で AA11人 (12.4%), A24人 (27%), B40人 (44.9%) C14人 (15.7%), 後期で AA7人 (7.9%), A17人 (19.1%), B31人 (34.8%), C33人 (37.1%), 評価不能 1 人 (1.1%) であった。成績評価のボリュームゾーンを比較すると, 前期に比べ後期は成績優秀者 (AA 評価と A 評価) が減り, C 評価の学生が大幅に増えた。前期に比べ後期の学習内容が難化し, 受講生の学習意欲が維持できなかったことが原因だと考えられる。事実, 図 9 に挙げた授業アンケート結果を見ると, 前期から後期にかけて, 1 回の授業に対して 1 時間以上予復習を行った学生数は微増したものの, 2 時間以上かける学生数は減少していた。学習内容が難化したにもかかわらず, 学生の自習時間が増えなかった点は今後の課題となろう。

とは言え, 半数以上の学生が毎時の授業に対して 1 時間以上予復習しているというのは, 1 年次必修科目や他の 2 年次選択必修科目には無い特徴である。一定の負荷をかけているにもかかわらず, 当該科目に対する受講

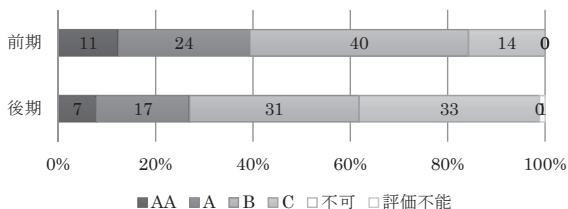


図 9 2016年度英語理解・発展 I ・ II の成績評価得点分布

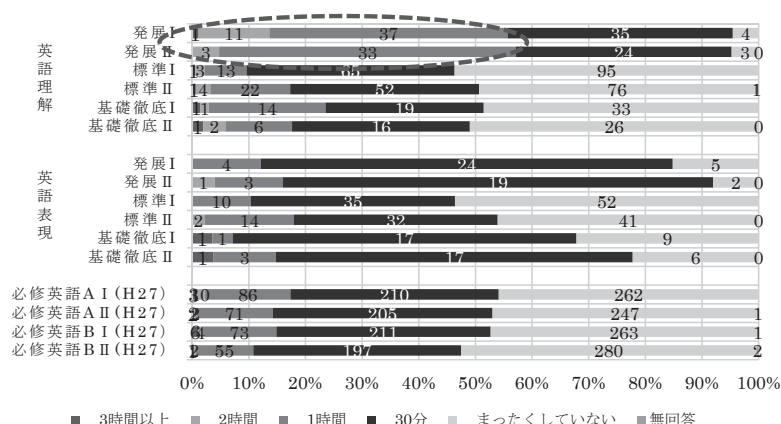


図10 2016年度授業アンケート結果（授業外学習時間）

生の満足度は相対的に高かった。授業満足度に関する授業アンケート結果の全体像（英語科目）は図10を参照されたい。

最後に、英語理解・発展からみえる新カリキュラムの今後の課題を以下のようにとらえて、本稿のまとめとしたい。旧カリキュラムの1年次必修科目（英語A）と異なり、新カリキュラムの2年次選択必修科目における3段階の習熟度別クラスは受講生の英語運用能力にあった教材を使用できるという利点がある。「浮きこぼれ」問題への対策が取れていると言え、一定の評価はできる。しかし、新カリキュラムの1年次必修科目が発展レベルの学生にとって易し過ぎるという課題は残る。先に触れたプレイスメントテスト結果でも、発展レベルの学生と基礎徹底レベルの学生との得点差は2倍近くあった。各々の英語運用能力に合った教材を早期より提供する意義は大きい。また図9と図10で示した通り、発展クラスにおいて授業外学習時間と授業満足度に一定の相関性が認められることから、1年次の「浮きこぼれ」対策を早急に行う必要があることは明らかである。以上の理由により、レベル別教材を用いた習熟度別クラスを1年次前期より導入することを強く希望する。

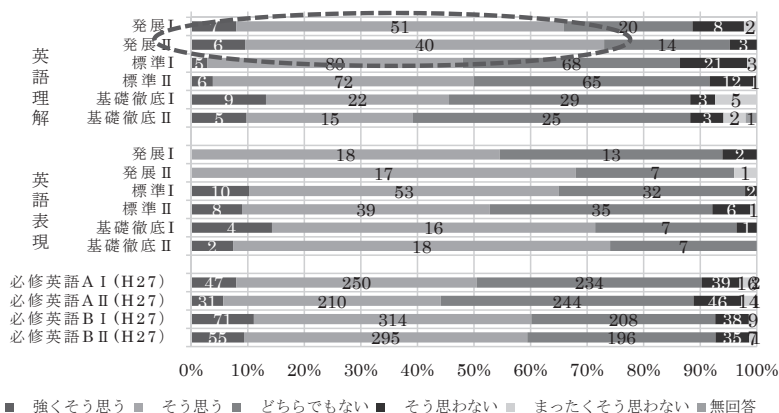


図11 2016年度授業アンケート結果（授業満足度）

2.4 英語表現・基礎徹底Ⅰ・Ⅱ

The 基礎徹底 level of the new 英語表現 series of classes is the lowest level of that series offered at HUE. While the students themselves were able to choose between the two 選択必修 options of 英語表現 and 英語理解, the level of their class was decided by English department faculty.

The stated goals for the 英語表現・基礎徹底 class were essentially: 1) to become able to use both spoken and written basic level English to convey information about everyday matters, and 2) to become able, should a need or an opportunity arise, to communicate using English learned without becoming fearful or hesitating.

There were three sections of 基礎徹底 run this year: two of them taught by a full-time faculty member and the remaining one taught by a part-time teacher. In both the first and the second semester, enrollment for each of these three sections was approximately 12 second-year students. All classes were 90 minutes in length.

The textbook used was the “starter” level of the second edition of *Smart Choice*. As one would expect given the intended level of the class, the gram-

mar taught / reviewed over the course of the school year included such fundamentals as the verb “be,” the simple present tense, possessives, the present continuous tense, prepositions of place, countable / uncountable nouns, the use of “some” and “any,” the past tense of the verb “be,” and the past tense of regular and irregular verbs. The content dealt with included personal information, personal possessions, likes / dislikes, daily activities, abilities, present activities, describing one’s home, giving directions, food, and the past.

Both teachers were very pleased with the class sizes. Most of the students could not accurately be described as “enthusiastic,” but in general they did seem to make a sincere effort at learning while in class. Getting them to study, do homework, etc., outside of class was a challenge. There were no problems with talking during class, and there were only a few students who sometimes nodded off to sleep. At times there was evidence of some students having problems maintaining concentration. Repetition and review are always important in foreign language courses, but they seemed especially so with this class. The text used was felt to be at an appropriate level for the students, though it required supplementation with additional grammar exercises and other kinds of practice.

Each semester three cumulative tests of increasing weight (15%, 30%, and 45%) were given, which accounted for 90% of the students’ grades. The remaining 10% was determined according to performance criteria decided on by each teacher. 76% of the students enrolled for the first semester earned credit for the course, while 74% did so in the second semester. Of those who failed to earn credit, 33% (first semester) and 44% (second semester) did so due to failure to sufficiently attend class and/or take tests.

Overall, the first year of this new course was felt to be mostly successful.

2.5 英語表現・標準Ⅰ・Ⅱ

The 英語表現・標準 course is the middle level 英語表現 course. It is a mandatory course which is taken by all students who have successfully completed the 必修英語 B course and, 2016 being the second year of the English Department's revamped curriculum, is made up of second-year students. The intended focus of the course is, as is suggested by the title, on productive English language skills, namely speaking and writing. Class sizes are moderately small with approximately 20 registered students per class.

Topics covered in the course are self-introductions, occupations, likes and dislikes, sports, daily routines, talking about past experiences, making comparisons, describing the appearance and character of people, talking about places and explaining locations, describing vacations and talking about future plans. In terms of level, the target grammar is similar to what is studied in Junior High School English classes.

For each topic, after some appropriate warm-up activities, relevant vocabulary is introduced and target grammar presented. Students are provided structured exercises in which they are expected to practice speaking and, after further grammar and reading exercises, to produce short written passages in which the target grammar and vocabulary is used.

Being the middle level course, the students taking these classes have a wide range of English language ability and motivation. Despite the target level being relatively low, many students struggle to master the course content. It appears to me that students that struggle tend to rely on their current grammar knowledge and limited, and somewhat fossilized, vocabulary base.

From my own personal observation, regardless of their starting level, students who are fully engaged in the classes—listening carefully to instruction, asking questions when unclear about something, performing focused in-class practice and doing required review and preparation—both make good

progress and finish the course with a good degree of confidence in producing the target language. A key characteristic of these students is that they are prepared and keen to extend themselves in class rather than fulfilling the minimum requirements of the course.

2.6 英語表現・発展Ⅰ・Ⅱ

This course, begun in 2016, is one part of the reorganization and revamping of the English curriculum undertaken by the university administration. It is one of three courses offered to second-year students and is designed to attract students with a higher ability and/or interest in developing their communicative English skills. The course is intended to further strengthen speaking and writing skills which are two of the four skill areas that were covered in the students' first-year English classes, 必修英語 A, B, and C. Course content is designed to increase students' ability to communicate in English their understanding of familiar topics in everyday life. The text for this course was *First Choice Book 2*, published by Oxford University Press. The text and course content are intended to comply with the Common European Framework of Reference for Languages levels A2.2 (Basic User (Waystage or Elementary)) to B1.1 (Independent User (Threshold or Intermediate)).

In order to comply with the class syllabus, course content was, initially, based on material and activities from the textbook. Students were very cooperative and seemed to enjoy the class. Some pair and group activities provided by the faculty were added to the course as a way of enlivening the class time. Feedback via comments written on attendance cards overwhelmingly indicated that students enjoyed the communicative activities much more than the activities and work provided by the text. Students were required to do homework from an accompanying workbook and most stu-

dents handed in this work in a timely manner. It was evident from student comments and classroom behavior that the communication activities devised by the faculty were far more interesting to students and more effective in improving their English ability than the material provided by the text. Thus, in the second semester, and although the syllabus was rigorously followed, large sections of the text were not used and, instead, communicative activities designed by faculty were introduced into the course. Students responded with increased interest and enjoyment in the class and improved skills.

Students in this class were selected based on the grades they earned in first-year English, and by the interest they indicated on a year-end survey. On average, these students do have a higher interest in English and show more advanced skills than their contemporaries. Students are very interested in increasing their speaking skills, as opposed to their writing skills. Students' ability to write a coherent sentence in English is almost non-existent and time could be better used by providing activities and guidance to develop their oral communication skills. This course should be adapted to the students' interests and abilities and changed to an oral communication class based on active learning.

3. 選択科目

この章では本学の新英語カリキュラムのうち選択科目についての報告をする。該当科目は海外研修英語Ⅰ・Ⅱ，ビジネス英語Ⅰ・Ⅱ，基礎英会話Ⅰ・Ⅱ（平成29年度より開講），発展英会話Ⅰ・Ⅱ，資格英語Ⅰ・Ⅱ，資格英語Ⅲ・Ⅳの計5種類である。

3.1 Introduction

The status of elective courses in an academic program is always precarious. Such courses sit at a difficult juncture where the interests of the faculty

and the administration are not always in agreement. On the one hand, faculty may wish to provide a wide variety of course options in the hope of matching students' needs and appealing to students' intrinsic motivations but, on the other hand, when faced with such an approach, academic administrators may bristle at the potential for inefficiencies, and blanch at the sight of courses with low student intake numbers. Administrators, understandably, tend to prefer compulsory courses and the predictability and efficiency of management that such courses guarantee.

Under the latest English curriculum reform at HUE, we can see both of these tendencies at work. There has been an administration-directed shift towards compulsory courses, but at the same time, the academic faculty have been able to establish a new category of purely elective courses.

Generally speaking, any curriculum reform that establishes new elective courses will inevitably lead to some initial disruption of predictability, as the previously regular distribution of students taking the various available courses, which I will call here the "student flow pattern," shifts under the new curriculum. In the early years after such reform implementation, close scrutiny of the curriculum in action is required, and fine-tuning to both the course provision and the timetable may become necessary.

We, at HUE, are currently in that post-reform early period, and across the English curriculum a new, predictable student flow pattern, especially for the elective courses, is yet to be identified. Consequently, making any definitive statement about the outcome of the reform remains premature. Nevertheless, it is worth taking an overview of the changes that have thus far occurred, a reconnoitering progress report, as it were, which can form a part of the scrutinization process and provide early information for curriculum designers on whether and, if necessary, what further adjustments might be necessary.

3.2 The Pre-Reform Situation

Prior to the current reform, the curriculum contained two categories of course; the four first-year compulsory courses, 英語 A I・II and 英語 B I・II, each worth one credit per semester, making a total of four compulsory course credits, and a second category of sixteen courses classified as elective-compulsory, from which students were expected to choose courses worth at least two credits.

By taking the four compulsory course credits and two elective-compulsory course credits, the minimum graduation requirement of six credits in English could be fulfilled.

A small percentage of the student body would opt to take more English courses than the minimum graduation requirement. These courses had to be chosen from the same pool of sixteen courses in the elective-compulsory category. The additional course credits were then designated as elective course credits.

3.3 The Post-Reform Situation

After the reform, the minimum graduation requirement has increase to a total of eight English credits, and there are now three categories of course; compulsory, elective-compulsory and the newly established elective category.

The compulsory course requirement for first-year students is now five credits, consisting of 必修英語 A I・II, 必修英語 B I・II and 必修英語 C I, and for second-year students, it is one credit, 必修英語 C II. So, in total, there are now six compulsory course credits.

In addition, second-year students are expected to take two credits chosen from a drastically reduced number of courses in the elective-compulsory category. These elective-compulsory courses are now designated as exclusively

second-year courses, and students are required to choose their two credits from one of only two options, 英語表現 I・II, which focuses primarily on the productive skills of Speaking and Writing, and 英語理解 I・II, which focuses primarily on the receptive skills of Reading and Listening.

By successfully completing both the six compulsory and two elective-compulsory courses, students can fulfil their graduation requirement in English.

If that was the full extent of the curriculum reform, the post-reform situation would only amount to a revised curriculum where the variety of English course options had been significantly curtailed and, once the graduation requirement of eight credits had been achieved, there would be no further courses available for interested students to continue their English studies.

To counter the possibility of that severely limiting outcome, a third, and entirely new category of twelve elective courses has been set up to cater for students wishing to take more than the minimum credit requirement in English. Many of these new elective courses are, essentially, revamped versions of the elective-compulsory courses from the pre-reform curriculum.

3.4 A Preliminary Administrative Outcome

As previously mentioned, being able to predict the student flow pattern within a curriculum is very useful from an administrative point of view, since it enables the construction of an efficient curriculum and timetable, with the right number of classes containing an optimal number of students, scheduled suitably across the school week.

Compulsory courses ensure a student flow pattern that is entirely predictable. It is the most easily administered part of the curriculum. In the case of HUE, pre-reform, this predictable flow covered the first four English credits. Only after that did things get less predictable, as students had to choose from amongst the sixteen elective-compulsory courses for their final two

required credits. This level of unpredictability was added to by the fact that some students would then take further elective-compulsory courses as part of their elective course quota.

However, despite the large number of choices for students, we should not overstate the randomness of the pre-reform situation. Although there was some uncertainty when compared to the compulsory courses, over time, reasonably consistent, and so reasonably predictable, student flow patterns emerged across the sixteen elective-compulsory courses and so the problems of establishing an efficient curriculum and efficient timetabling were gradually minimized.

The reformed curriculum has altered the flow of students passing through the English program. Unquestionably, the new curriculum, with its increased compulsory course requirement, increases overall predictability and thus eases management. However, since, at the time of writing in March 2017, we are only two years downstream from the initial reform implementation, it is, as yet, unclear what the full, post-upheaval, new student flow pattern will look like.

The compulsory course component now stretches to six out of a total of eight required credits, and the remaining two credits can be selected from one of only two elective-compulsory options. So, given that the majority of students will only opt to take the required minimum of English credits, the administration of the required curriculum becomes very simple. In contrast, the student flow through the new category of twelve entirely elective courses is currently very uncertain. It is likely, though, that, as with the old curriculum, a regular student flow pattern will emerge, and efficient timetabling, which is currently difficult, will become easier.

3.5 The Data

The tables below sets out all of the elective-compulsory courses and the new elective courses provided under the English curriculum for the three years, 2014, 2015 and 2016.

2014 is the year immediately preceding the implementation of the curriculum reform, and can be considered a typical pre-reform year in terms of the student flow pattern observed.

2015 is the year when the curriculum reform was introduced. The new curriculum only applies to first-year students.

2016 is the second year of the new curriculum, which now applies to first and second-year students.

There are seven separate tables corresponding to the seven different types of course provided over the period.

For each table, I have included course titles, numbers of classes, academic years, semesters, and the numbers of students from each year who signed up for each course, thereby showing the student flow patterns.

表 3 English Preparation for Overseas Programs

Course Title	Class	Year	Semester	First-Year Students	Second-Year Students	Third-Year Students	Fourth-Year Students	Total
English for Studying Abroad A		2014	1	0	8	3	2	13
English for Studying Abroad B		2014	2	2	5	0	0	7
English Abroad I		2015	1	0	7	1	1	9
		2016		0	7	2	0	9
English Abroad II		2015	2	0	7	2	0	9
		2016		9	5	1	1	16

*“English for Studying Abroad” was replaced in 2015 by “English Abroad,” which has a broader syllabus aimed not only at students who are planning to study overseas, but also at students who may be involved in overseas projects, or planning on working overseas, or simply planning an overseas trip.

表 4 English for Business Situations

Course Title	Class	Year	Semester	First-Year Students		Second-Year Students		Third-Year Students		Fourth-Year Students		Total
Business English Conversation I	a	2014	1	0	0	17	32	0	6	1	5	18
	b			0		3		0		1		4
	c			0		2		2		1		5
	d			0		10		4		2		16
Business English Conversation II	a	2014	2	0	0	9	16	0	3	0	1	9
	b			0		2		0		0		2
	c			0		0		2		0		2
	d			0		5		1		1		7
Business English I	a	2015	1	0	0	10	25	0	2	1	2	11
	b			0		15		2		1		18
	a	2016		0	0	0	1	0	0	0	4	0
	b			0		1		0		4		5
Business English II	a	2015	2	0	0	3	7	1	1	0	0	4
	b			0		4		0		0		4
	a	2016		0	0	0	0	0	1	1	4	1
	b			0		0		1		3		4

*"Business English Conversation" was replaced in 2014 by "Business English," which aims to cover all aspects of English communication, spoken and written, in a variety of business environments.

*Over the three years under consideration we can see a significant drop in the number of students taking "Business English" in 2015 and 2016, when compared with the number of students taking "Business English Conversation" in 2014. This can, perhaps, be explained by an administrative error that made "Business English" unavailable to the 2015 and 2016 intakes of students, under the new curriculum. For 2017, this error has been corrected and "Business English" is now available to all students.

表5 Basic General English

Course Title	Class	Year	Semester	First-Year Students	Second-Year Students	Third-Year Students	Fourth-Year Students	Total
Basic English I	a	2014	1	33	3	1	1	38
	b			24	9	2	3	38
	c			28	4	2	2	36
	d			26	4	7	3	40
	e			18	8	8	1	35
	f			8	18	6	8	40
	g			27	6	3	0	36
	h			36	1	0	0	37
	i			31	2	2	1	36
	j			23	14	1	0	38
	k			28	4	3	0	35
	l			30	5	1	1	37
	m			36	3	0	1	40
	n			36	0	0	0	36
	a	2015		0	4	1	0	5
	b			0	5	0	2	7
	c			0	6	2	3	11
	d			0	2	1	1	4
	e			0	7	1	6	14
	f			0	12	7	1	20
	g			0	11	0	1	12
	h			0	2	1	1	4
	i			0	16	11	10	37
	j			0	5	3	1	9
	k	0		2	3	1	6	
	a	2016		0	1	4	1	6
	b			0	1	5	7	13
Basic English II	a	2014	2	33	4	2	0	39
	b			23	6	1	2	32
	c			28	1	0	0	29
	d			26	4	6	1	37
	e			21	14	1	4	40
	f			12	14	8	6	40
	g			28	2	2	1	33
	h			34	3	1	1	39
	i			29	0	3	3	35
	j			29	1	3	0	33
	k			28	5	3	0	36
	l			28	2	2	1	33
	m			35	4	0	1	40
	n			35	1	0	1	37
	a	2015		0	8	0	0	8
	b			0	0	0	1	1
	c			0	5	5	4	14
	d			0	1	0	2	3
	e			0	1	3	7	11
	f			0	11	3	2	16
	g			0	4	0	2	6
	h			0	2	2	0	4
	i			0	10	3	2	15
	j			0	4	5	0	9
	k	0		3	1	0	4	
	a	2016		0	1	3	3	7
	b			0	1	1	9	11

*"Basic English" is a remnant of the pre-reform curriculum, and will be phased out in 2018. There is no plan for it to be replaced.

表6 Basic Spoken English

Course Title	Class	Year	Semester	First-Year Students		Second-Year Students		Third-Year Students		Fourth-Year Students		Total
English Conversation I	a	2014	1	17	297	3	47	5	14	0	9	25
	b			21		4		0		0		25
	c			19		4		0		2		25
	d			24		1		0		0		25
	e			23		1		0		0		24
	f			14		6		2		0		22
	g			22		1		0		0		23
	h			13		7		4		1		25
	i			24		0		0		1		25
	j			10		9		3		3		25
	k			21		4		0		0		25
	l			22		2		0		1		25
	m			22		3		0		0		25
	n			22		2		0		1		25
	o			23		0		0		0		23
	a	2015	0	5	8	35	1	13	0	6	9	
	b		0		0		1		0		1	
	c		1		4		0		2		7	
	d		1		7		1		0		9	
	e		2		11		0		3		16	
	f		0		5		6		0		11	
	g		1		0		4		1		6	
	*2016 Course Ended											
English Conversation II	a	2014	2	17	275	2	25	2	9	0	6	21
	b			21		1		0		0		22
	c			21		1		0		2		24
	d			17		0		0		0		17
	e			19		1		1		0		21
	f			12		0		1		0		13
	g			20		2		0		0		22
	h			16		8		0		1		25
	i			21		0		0		0		21
	j			12		3		4		2		21
	k			20		3		0		1		24
	l			21		1		0		0		22
	m			22		1		0		0		23
	n			18		2		1		0		21
	o			18		0		0		0		18
	a	2015	0	31	5	15	0	4	2	4	7	
	b		2		0		0		0		2	
	c		4		0		0		0		4	
	d		4		0		0		0		4	
	e		18		4		0		1		23	
	f		2		6		1		0		9	
	g		1		0		3		1		5	
	*2016 Course Ended											

*"English Conversation I & II" were phased out in 2016, however a new course with an essentially similar syllabus, "Basic English Conversation," is scheduled to be introduced in 2017.

表 7 Intermediate Spoken English

Course Title	Class	Year	Semester	First-Year Students		Second-Year Students		Third-Year Students		Fourth-Year Students		Total	
English Conversation III	a	2014	1	5	8	5	7	0	6	0	0	10	21
	b			3		2		6		0		11	
	a	2015		1	3	1	0	5	17				
	b			0	4	1	3	6					
	c			0	4	1	1	6					
English Conversation IV	a	2014	2	5	7	2	4	3	4	1	2	11	17
	b			2		2		1		1		6	
	a	2015		2	2	0	0	4	12				
	b			1	2	0	0	3					
	c			1	3	1	0	5					
Intermediate English Conversation I	a	2016	1	0	0	17	26	1	3	1	3	19	32
	b			0		9		2		2		13	
Intermediate English Conversation II	a	2016	2	8	10	5	9	1	3	4	6	18	28
	b			2		4		2		2		10	

*“English Conversation III & IV” were phased out in 2016, but were immediately replaced by “Intermediate English Conversation,” which has a similar syllabus.

表 8 English Standard Qualification Test Preparation

Course Title	Class	Year	Semester	First-Year Students		Second-Year Students		Third-Year Students		Fourth-Year Students		Total	
Standard Qualification English I	a	2014	1	30	135	6	12	1	1	1	3	38	151
	b			39		0		0		0		39	
	c			38		0		0		0		38	
	d			28		6		0		2		36	
	a	2015		1	9	2	4	16	40				
	b			3	6	24	1	1		5	11		
	c			1	9	3	0	13					
	a	2016		6	10	1	1	18	57				
b	0		35	45	3	4	1	2		39			
Standard Qualification English II	a	2014	2	27	127	2	6	2	4	1	1	32	138
	b			36		0		0		0		36	
	c			34		0		0		0		34	
	d			30		4		2		0		36	
	a	2015		7	9	1	0	17	51				
	b			8	27	2	18	0		2	4	22	
	c			12	7	1	2	22					
	a	2016		10	1	3	2	16	53				
b	22		32	12	3	4	6	37					
Standard Qualification English III	a	2014	1	15	28	6	11	1	13	0	0	22	52
	b			13		5		12		0		30	
	a	2015		0	0	10	13	5	5	1	2	4	20
	b			0	3	0		1		10			
	a	2016		0	0	8	9	1	2	1	2	3	13
	b			0	1	1		1		3			
Standard Qualification English IV	a	2014	2	14	26	1	4	4	9	1	2	20	41
	b			12		3		5		1		21	
	a	2015		4	2	4	3	4	4	2	2	12	13
	b			0	1	0		0		1			
	a	2016		7	1	2	1	1	2	1	1	11	12
	b			1	8	0		1		0		1	

*“Standard Qualification English” focuses primarily on preparation for the TOEIC test.

表 9 Computer Assisted Language Learning

Course Title	Class	Year	Semester	First-Year Students	Second-Year Students	Third-Year Students	Fourth-Year Students	Total
CALL English I		2014	1	0	17	4	3	24
		2015		0	6	3	5	14
		2016 *Course Ended						
CALL English II		2014	2	1	3	4	2	10
		2015		1	1	3	1	6
		2016 *Course Ended						

*"CALL English" was originally set up in 2007 as a part of a research project studying self-directed language learning using on-line study materials. After nine years of mixed results, the course was phased out in 2016. There are no plans for a replacement.

3.6 A Proposal

In the field of education, it is generally recognised that self-directed learning in an environment that matches with students' proficiency levels is more likely to lead to successful learner outcomes. Going a step further, for a learner to be self-directed, a key element is the complicated psychological construct, motivation. Second language acquisition is an inherently lengthy and difficult process, and understanding the motivations and demotivations that affect the learner is an essential part of the educator's role. Importantly, the relationship between the learning environment and the learner's motivation is reciprocal, and there is the potential for radically different outcomes, for example, in the emergence of either a virtuous circle of motivated learners in a conducive environment (the educator's ideal), or a vicious circle of demotivated learners in an obstructive environment (the educator's migraine).

Compulsory courses force students to study according to a potentially demotivating external agenda. Providing a choice of elective subjects gives students the opportunity to establish some control over their learning and become more self-directed.

Under the current reform, although elective courses have been established, they are marginalised insofar as they cannot form a part of the minimum graduation requirement of eight credits. This means that such courses are likely to only be taken by the comparatively small number of students who already have the motivation and self-direction to further extend their English studies.

In contrast, for the large majority of students, studying English will now be an almost entirely compulsory activity, with only a single minimal option to choose between focusing on receptive skills or productive skills for two credits in their second year.

Under such a system I would argue that the potential to create demotivated students and migraine-suffering educators is vast.

As an alternative, where larger numbers of students maintain a higher level of motivation, and fewer headaches furrow the brows of the educators, I should like to propose a return to the pre-reform structure of just two course categories, by merging the newly establish category of elective courses back into the elective-compulsory category.

By doing this, students would still have to achieve a minimum requirement of eight credits, but would be able to select from a far greater range of courses for the final two credits taken in their second year.

Administrators might argue that the complexity and uncertainties of the necessitated course-selection process would merely pass the headaches from the educators back to the administration. However, I believe a well-managed selection process is possible, and once the normal student flow pattern through such a curriculum had been identified, this alternative curriculum would be as efficient and easy to administrate as the current system.

おわりに

本教育実践記録では、広島経済大学で平成27年度からはじまった新英語

カリキュラムの現状に関する各担当者からの報告がなされた。またそれに先立って新カリキュラムが形成された経緯も説明された。最後に、これらすべてをふまえつつ、CC 会議後の新英語カリキュラム始動によって、本学における英語教育がどの程度、改善されたか、またそれをさらによいものにしていくための課題はなにかについて述べてみたい。

まず改善された点を以下にあげてみよう。

- 1) 1 年次の英語の授業の回数が週 2 回から週 5 回に増え、語学学習にもっとも重要である反復練習（習慣化）が可能となった。
- 2) 1 回あたりの授業時間が90分から45分に減り、学生の集中力が以前より維持できるようになった。
- 3) 一部の科目において少人数化（20人クラス）が実現し、よりきめ細やかな指導ができるようになった。
- 4) 科目間の連携がとれるようになった。
- 5) 科目「間」（多様な科目名のもとで開講されるクラスのあいだ）または科目「内」（同じ科目名のもとで開講される複数のクラスのあいだ）で、評価方法に関してかなりの程度の統一性が達成された。
- 6) 2 年次において各レベルの学生にあったコンテンツで授業ができるようになった。

次に現段階における本学の英語教育の直面する課題と、それらを解決するために考えられる方策のいくつかをあげてみよう。

- 1) 最大の課題は、1 年次に英語レベル上位層で起こっている「浮きこぼれ」（「落ちこぼれ」の反対の現象）である。この層の英語力を伸ばそうとするならば、1 年次からレベル別の英語教育を行うべきであろう。これから本学の偏差値をあげようとするならば、なおさらである。
- 2) 大学入学までほとんど英語を学習してこなかった者たちが、推薦入試

を通して相当数、入学してきており、彼らの多くは本学学生の英語力の平均的レベルに設定されている必修英語の授業のレベルにもついていけない。彼らに英語力をつけさせるには、1年次から彼らにフォーカスしたりメディア教育を行うべきであろう。

- 3) 1～2年次に必修または選択必修を落とす学生が年数の経過とともに増えるのは必至であり、教員配置・教室確保の問題がますます顕在化することが考えられる。そのためには人員の増強と語学授業の可能な教室の増設が必要となるであろう。
- 4) 必修または選択必修科目の成績評価は、その90%を複数回おこなう小テストのスコアにもとづかせているが、英語科の教員のなかには、授業内でのアクティビティーに対してより多くの点数を配分することで、学生の授業参加へのモチベーションをあげるべきである、と考える者もいる。どのようにすれば、クラス間の公平性を担保しながら授業内課題の達成に対する評価の比重を上げることができるかを検討してみる余地がある。
- 5) 現在、本学においては3年次の進級条件のなかに「必修英語の6単位のうち4単位を修得していること」が含まれているが、現場の教員のあいだでは、広島「経済」大学でなぜ「英語」が進級条件となっているのか、という疑問も出てきている。この点についての再考が望まれる。

このように広島経済大学の英語教育はこの8年にわたって改革を重ねてきた結果、一定の効果をあげていると評価できる一方で、依然として解決すべき課題もある。とりわけ「必修」という形式が要求する「統一性」と、さまざまな英語力の学生が入学してきているという現実が要求する「多様性」のあいだの「中道」を探る必要があろう。

注

- 1) CC 通信 No. 1から No. 30を参照。
- 2) 平成28年3月まで広島経済大学経済学部助教, 平成29年4月から大阪成蹊短期大学グローバルコミュニケーション学科講師
- 3) 広島経済大学経済学部准教授
- 4) 広島経済大学経済学部准教授
- 5) 広島経済大学経済学部准教授
- 6) 広島経済大学経済学部助教
- 7) 広島経済大学経済学部教授
- 8) 広島経済大学経済学部准教授
- 9) 広島経済大学経済学部助教
- 10) 広島経済大学経済学部助教
- 11) 平成29年3月まで広島経済大学経済学部教授
- 12) 広島経済大学経済学部准教授
- 13) 広島経済大学経済学部教授
- 14) 広島経済大学名誉教授
- 15) 文部科学省 (2014) 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 (概要) ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/1352460.htm